

論文の内容の要旨

論文題目 明治日本における社会民主主義の形成——片山潜とその時代——

氏名 大田 英昭

本博士論文は、片山潜（1859～1933年）の思想形成とその活動の歩みを追跡し、それを通じて彼を中心とする明治期の社会民主主義運動の形成と展開の過程を考察するとともに、この運動の思想史上の意義を解明することを目的とするものである。1901年の社会民主党の結成に端を発し、日露戦争期の平民社、日露戦後の新紀元社と日本社会党、そして社会主義運動分裂後の「議会政策派」へと連なる黎明期の社会民主主義の流れは、従来の歴史研究において、他の社会主義の諸思潮（アナーキズムや国家社会主義）の流れとともに、「初期社会主義」ないし「明治社会主義」として一括的に扱われてきた。だが、社会主義・民主主義・平和主義という三つの理念を掲げて出発した明治期の社会民主主義は、議会制民主主義の是非をめぐるアナーキズムと、また平和主義の是非をめぐる国家社会主義と、鋭い対立関係にあったのである。こうした思想的特質をもつ黎明期の社会民主主義を、他の諸思潮から区別される独立した研究対象として扱うことによって、日本における社会主義運動の原点としてのみならず、自由民権から大正デモクラシーへとつながる民主主義運動の媒介者として、また日露戦争期の非戦論に発する平和運動の起点として、日本近代の思想史上における明治の社会民主主義運動の重要な位置が浮かび上がってくるはずである。

このような黎明期の社会民主主義の思想と運動を創り出した中心人物が片山潜であった。片山は1884年に単身米国に渡り、十一年に及ぶ苦学生活の中で社会学とキリスト教神学を学んで、96年に帰国した。それはちょうど、日清戦後の産業革命の急速な進展に伴い、労働問題や都市問題など「社会問題」が日本にも出現し始めた時期であった。帰国した片山はいち早くこれらの問題に取り組み、キリスト教に基づくセツルメント事業の実践者として、また日本における最初の労働組合運動の指導者として、さらに都市改革の先駆的な提唱者として、活発に動き始めた。これらの活動を通じて片山は次第に、「社会問題」を根本的に解決するには、生産手段の私有に基づく資本主義制度を根底から改め、社会主義のシステムへと移行させねばならないと確信するようになった。そしてこの理想の実現

に向けて片山が打ち出したのが、労働者を政治的に結集しその力を背景に普通選挙を実現することによって議会に労働者の代表を送り込み、立法手段を通じてその権利を拡充し、徐々に生産手段を公有化して公正な生産と分配のシステムを確立することを目指す、社会民主主義の運動方針だったのである。国際社会主義（第二インターナショナル）運動と連絡を取り合いながら、片山は1901年の社会民主党の結成を主導し、以後十年に渡って社会民主主義運動のリーダーとして活躍した。この運動は、明治末の「大逆事件」を背景とする大弾圧の中で逼塞し、活動の道を絶たれた片山は1914年、亡命同然の形で米国へと去って、その後二度と日本の土を踏むことはなかった。

本博士論文は、こうした片山の半生の思想と活動の軌跡を丹念に跡付けることによって、黎明期の社会民主主義運動の形成と展開の過程を、その思想的源流から解明してゆくことを目指すものである。かかる研究目的と方法の下、本論文は大きく四つの課題を設定し、それぞれの課題に対応する四つの部から構成されている。以下、それを説明する。

第一の課題は、片山の思想形成のあり方を少・青年期に遡って明らかにし、後の社会民主主義運動につながってゆく思想的な基盤をそこに探り出すことである。この課題に取り組む「第1部 片山潜在の思想形成」は、以下の三つの章から成る。第1章では、幕末・維新期の農村で庄屋の次男として成長した少年片山が、故郷の美作地方を襲う歴史的激動に翻弄されながら、やがて〈文明〉の中心へと向かう情熱に衝き動かされてゆく経緯について考察した。第2章では、1881年の上京から、84年の渡米を経て、96年の帰国に至る十五年間の片山の軌跡を追い、その間における彼の思想発展の過程を追究した。東京の漢学塾で国家意識を植え付けられた片山が、渡米後の苦学の中でキリスト教に入信し、その信仰を通じて「人類」という観念を得て、やがて国家を超える全人類の同胞としての一体性の実現を自己の任務とするに至る過程が、そこで跡付けられた。続いて第3章では、片山が米国の大学や神学校でキリスト教とともに摂取した社会学の内容を検討した。十九世紀末の米国で深刻化していた労働問題や都市問題など「社会問題」を、片山は先進諸国の産業文明の弊害たる暗黒面として理解し、その克服を目指して文明社会を改良する手段として諸種の社会事業を実地に学んだのである。

第二の課題は、社会民主主義の思想と運動が二十世紀初頭の日本に登場する思想的背景として、資本主義的産業の発展に伴って現れる労働問題など「社会問題」への対処をめぐる諸見解が、日本社会の中でどのように形作られたかを解明することである。この課題に取り組む「第2部 明治日本と社会問題」は、第4・5章の二つの章から成る。第4章では、日清戦争前の日本で、来たるべき「社会問題」についてどのような議論が知識人たちによって行われていたかを検討した。そして、社会問題への対応策をめぐる、社会政策学・国粹主義（政教社）・資本家の金力による労働者鎮撫論（福沢諭吉）・労働者組織論・社会的キリスト教、という五つの思潮が当時存在していたことを明らかにした。また第5章では、いわゆる社会問題が日清戦争後に実際に出現するにあたり、それまでの議論では客体的対象にすぎなかった労働者自身がいかなる主体的意識を形成してゆくかを、初期労働組合運動に即して分析し、とりわけ同職集団の広範な連帯を支えた熟練工のエートスに光を当てた。

第三の課題は、1896年日本に帰国した片山の、日清戦後に出現した「社会問題」——労働問題と都市問題に対する取り組みを検討し、その理論と実践を通じて社会主義の思想がどのように結晶していったかを究明することにある。この課題に取り組む「第3部 片山潜在と社会問題」は、第6～8章の三つの章で構成される。第6章では、労働問題への対応として片山が推し進めた労働運動の経過を追い、それとともに発展した彼の思想の動きを分析した。片山は労働問題の本質を「文明的工業制度」の賃労働システムに内在する労資間の分配の不正として捉え、これを改善する手段として労働組合や協同組合の運動の実践に取り組み、さらに議会を通じた労働立法を目指す政治運動へと進んで、最

終的に社会主義の立場に行き着いたのである。第7章では、都市問題を解決するための片山の都市政策論すなわち「都市社会主義」を考察した。「都市文明の賜」が少数の有力者に独占される一方、それに伴う弊害は多数の無力な市民の負担に押し付けられるという、文明の産物をめぐる分配の不正に、片山が都市問題の本質を見ていたことを本章は明らかにした。そして、都市問題の解決策として彼の示した、民主主義に基づく都市政治論と公共的・独占的事業の市有に基づく都市経営論とを結合させた都市社会主義の論理構造を、詳しく分析した。第8章では、当初社会改良家として出発した片山が、社会問題を解決する唯一の道として資本主義システムの克服＝「革命」を主張するに至る思想の過程を考察し、彼の到達した社会主義理論の内容を分析した。米国で学んだキリスト教と社会学に基づく進まないし進歩の観念が彼の社会主義受容の土台となったこと、そして彼の社会主義革命論もまた基本的に進化論の枠内にあったことが、ここで解明された。

第四の課題は、以上三つの課題をめぐる成果の上に立って、本論文の主目的たる、黎明期の社会民主主義の思想と運動が片山を軸にどのように形成・展開されたかを明らかにし、その思想史上の位置を究明することである。「第4部 社会主義・民主主義と明治国家」は以下の三つの章から成る。第9章は、社会民主主義運動の源流として日清戦後の普選運動・労働運動・社会主義運動の三者が片山を中心として合流し1901年の社会民主党の結成へと向かう過程を追った。その際特に、社会主義と改良的社会政策および民主主義とがどのように結びついたかを検討することを通じて、この時期の社会民主主義の思想的特質を明らかにした。第10章では、1905年のロシア第一革命と日比谷焼打事件の衝撃をきっかけに、社会民主主義の運動と思想が日露戦後に再編されてゆく経過を跡付けた。そこでは特に幸徳秋水の「直接行動論」への移行に焦点を当て、幸徳が明治憲法体制のみならず議会制民主主義自体に対する懐疑を深めて、社会民主主義から離脱してゆく過程を追究した。第11章では、幸徳らの直接行動論ないしアナーキズムに対抗して社会民主主義運動を継承する片山ら「議会政策派」の、明治末期における思想と運動の展開を考察の対象とした。この章では、とりわけ明治憲法体制の枠内での民主化を通じて社会主義への合法的変革を目指すという、議会政策派の革命の論理を詳しく分析した。そして、苛烈な弾圧と迫害に粘り強く抵抗する片山たちの闘いの中にこそ、社会民主主義の思想を前進させる可能性の契機が含まれていたことを明らかにした。

終章では、まず本論で追跡してきた片山の半生の歩みの総括を試み、彼の思想と行動の基底に「文明」と「進歩」に対する一貫した信念が存在することを確認したうえで、この信念を軸として片山の足跡を再構成した。ついで明治日本における社会民主主義運動の総括として、a. 民主主義、b. 労働運動、c. 人類同胞思想という三つの視角から、その思想史的意義および限界を次のように明らかにした。まずaについて、社会民主主義は、普選・政党内閣・言論思想の自由などを主張した点で大正デモクラシーの先駆としての意義をもつ。が、そこにはまた、明治憲法体制における天皇や軍隊の問題を軽視する傾向が一般にみられた。次にbについて、社会民主主義者の主張は単なる社会政策を超え、労働者自身によって労働問題を解決するという原則から、労働者の力で労働立法を勝ち取ることを目指すものだった。しかし労働組合運動の再建に失敗した彼らの主張はついに現実を動かす力を持ち得なかった。最後にcについて、明治期の社会民主主義者は、大日本帝国のアジアに対する侵略行動を批判し続けた当時唯一の勢力であった。しかし彼らの画期的な帝国主義批判の思想も、苛酷な弾圧の中で後退を余儀なくされたのであった。